

## 子どもの生きづらさに寄り添う戦後沖縄児童文学 —琉球新報児童文学賞短編児童小説を中心に

我部聖

このように書くと、いきさか身びいきのようだが、この児童文学賞の応募作品のレベルは、年々高くなっているような気がする。テーマも広がっているし、表現も豊かになっている。また、語りにさまざまな工夫がこらされているのだ。これは、何より児童に良い作品を通して大切な何かを訴えたい、という書き手の熱い心が強くなっていることの現れだろう。

世の中が子供たちにとってますます生きづらくなってきていることに対する危機感が、そういう作者たちの背中を強く押しているような気がする。そうして、その思いを作品として実現できる力を、多くの人たちが身に付けてきていることは確かなのだ。

1

沖縄近現代文学研究者の岡本恵徳が、第18回琉球新報児童文学賞の選評で述べた言葉が気になっていた。この選評が掲載された翌週の8月5日に岡本が亡くなり、いわば「最後の言葉」を書き記すなかで、子どもたちが生きづらい世の中に対する危機感が児童文学を書く作者たちの背中を押しているととらえていたからである。近年沖縄で注目されている「子どもの貧困」に対して文学に何ができるのかについて思いをめぐらせていたときに、岡本の言葉が思い出された。岡本が長年選考委員をつとめた琉球新報児童文学賞受賞作は、子どもたちの生きづらさをどのように描いてきたのかを考察するのが本稿の目的である。

「青い海児童文学賞」<sup>2</sup>の事業を引き継いで1989年に創設された「琉球新報児童文学賞」

1 岡本恵徳「第18回新報児童文学賞選評／総評」『琉球新報』2006年7月25日。

2 青い海児童文学賞は、「月刊誌『青い海』の出版社である〈青い海社〉と同教育振興会が、沖縄の児童文化振興の一つとして、1979年に設定したもの」であり、「毎年1回、〈短篇児童小説〉と、沖縄の民話や歴史などに取材した〈創作昔ばなし〉を広く一般から募集、入賞作品を『青い海』に掲載した。「児童文学の新しい書き手を養成するとともに、同分野に多くの関心を集める契機となっている」（岡本恵徳「青い海児童文学賞」（『沖縄大百科事典 上巻』沖縄タイムス社、1983年、9頁）。その後、「青い海」は145号（1985年）で終刊し、青い海児童文学賞は第6回（1984年度）で終了となった。審査委員は、第1回は新屋敷幸繁・儀間比呂志・徳田■（■は「ヰ」に「兪」、第2回と第3回は儀間・徳田・大湾雅常、第4回は儀間・徳田・岡本恵徳、第5回と第6回は徳田・岡本という顔ぶれであった。齋木喜美子によれば「第1回から第6回まで平均して80～90件ほどの応募があり、両部門とも最優秀作は該当がないものの優秀作16点、佳作34点、選外佳作8点の入賞作が誌上に掲載された」という（齋木喜美子『近代沖縄における児童文化・児童文学の研究』第Ⅲ部第1章第4節「雑誌『青い海』にみる児童文化・児童文学」、風間書房、2004年、238頁）。

は、「子どもたちの夢と希望をはぐくむ優れた創作作品」に贈られる賞として、「子どもたちの感性と夢を養い、昔ばなしの形をとって、子どもたちに語り聞かせるスタイル」の創作昔ばなし部門（400字詰め原稿用紙10枚）と「子どもたちの感受性や想像力を育てるもので、内容は自由」の短編児童小説部門（400字詰め原稿用紙20枚）を募集している<sup>3</sup>。巻末に受賞作一覧を載せたが、全30回のうち創作昔ばなし部門の正賞は13作、佳作は33作、短編児童小説部門の正賞は34作、佳作は34作である。選考委員は、第1回から第12回までは岡本恵徳・徳田■・仲程昌徳、第13回から第16回までは岡本・仲程・新垣任紀、第17回と第18回は岡本・新垣・もりおみずき、第19回から第27回までは新垣・もりお・齋木喜美子、第28回はもりお・齋木・武藤清吾、第29回と第30回は齋木・武藤・新垣勤子という顔ぶれであった。

本稿では、短編児童小説部門を中心に論じていきたい<sup>4</sup>。

## 1 沖縄の特殊事情

第1回短編児童小説部門正賞の樋口謙一「ガメラの南の島」は、シングルマザーの家庭の男の子「ぼく」が語り手（主人公）である。「ぼく」は、夜の店で働く母親のいないさびしさから仲間たちと深夜徘徊を繰り返す「朝寝坊の常習犯」であったが、向かいのアパートで毎朝決まった時間にカメラで空を撮影する「丸っこい巨体」の「ガメラ」（カメラと怪獣をもじったあだ名）と名付けた男との交流を通じて、深夜徘徊をやめる。作品は、本土から移住してきたカメラマンの「ガメラ」が西表島に撮影に行く留守の間、「ぼく」が代役として空を撮影するところまで描かれる。ここで注目したいのは、カメラの撮り方を教える「ガメラ」の口から「沖縄の特殊事情」が次のように語られる点である。

離婚率が高く母子家庭の多い沖縄では、給料の面で母親は夜の仕事に結果的につくことになり、夜、子どものそばにいてあげたくてもいてあげられない。子どものさびしさは募る。その背景を無視して、本土と同じ感覚で、子どもの深夜ハイカを一方的に取締るのは片手おちだ。取締るより先に、母親が夜の仕事に出なくてすむようにするとか、似た境遇の子どもが集まれる施設をつくるとか、その方が先決だという。<sup>5</sup>

その言葉を耳にした「ぼく」は、「本当は好きで深夜ハイカイしているわけではないのに、家族といっしょに夜の楽しい団らんのをときをすごせる級友たちに負い目をいだき、自分を

<sup>3</sup> 『琉球新報』1989年3月8日。

<sup>4</sup> 創作昔ばなし部門については稿を改めて論じたい。また沖縄県内の児童文学賞として、沖縄市社会福祉協議会と沖縄タイムス社が共催した「ふくふく童話大賞」（1992年～2013年、全22回）があり、受賞作はインターネットで公開されている。

<http://www.okicityshakyo.com/projects/%E9%81%8E%E5%8E%BB%E3%81%AE%E4%BA%8B%E6%A5%AD/fukufuku/%E5%85%A5%E9%81%B8%E4%BD%9C%E5%93%81/>

<sup>5</sup> 樋口謙一「ガメラの南の島」『琉球新報』1989年5月19日、夕刊。

いけない子と責めていた」が、「ガメラの言葉で救われた気になった」とつぶやく。

子どもが読む小説としては観念的・説明的<sup>6</sup>すぎるきらいもあるが、この小説には生きづらさを抱える子どもたちの居場所を考えるヒントがある。夜の仕事で働く母親<sup>7</sup>と一緒にいられないさびしさを抱える「ぼく」は、「ガメラ」という異質な他者との交流を通じて、深夜徘徊をやめるとともに「ガメラ」の代わりに空を撮影する「やりがい」を見つける。言いかえると、「ぼく」は「ガメラ」という空間に息つぎのできる居場所を確保したのである。

しかしながら、「ガメラ」がつぶやくような「沖縄の特殊事情」を描いた受賞作品は、あまり多くない。むしろ第2回以降で目立つのは、祖母や祖父を含めた老人と子どもの交流を描いた作品である。少し長くなるが、作品をあげてみよう。

本好きな祖母の願いを叶えるために孫が奮闘する當間律子「おばあちゃん好いかげんにしてよ」(第2回)、孫が祖父の背中のアザの秘密に迫る津嘉山ながと「おじいちゃんの背中」(第11回)、祖母の形見のこいのぼりを孫が探しに行く上條晶「おばあちゃんのこいのぼり」(第11回)、祖父の死を受け入れられず星を嫌う小学生の前に星の「キラリ」が現れる與那覇直美「お星さまのひみつ」(第15回)、祖母からもらった本を通じて家族との大切な思い出を再体験する富山陽子「スイートメモリー」(第16回)、不登校の小学生が祖母との中国旅行を通じて心を開く糸数貴子「中国からの絵ハガキ」(第17回)、宿題で町の伝説を聞きに来た小学生たちに『逆立ち幽霊』の話をする「おばあさん」があらわれる月長海詩「幽霊のお客さま」(第18回)、仲良しだった祖母からの贈り物を探すなぐもゆき「ステラ」(第21回)、不時着したイギリス人パイロットとの交流<sup>8</sup>を描いた仲吉建夫「デービッド・ジョーンズ三世」(第22回)、祖母の言葉をきっかけに転校先でのいじめを克服する長山しおり「美乃利の季節」(第27回)、吃音に悩む男の子が曾祖父の沖縄戦体験を聞いて友人と仲直りする平岡禎之「雨あがりの空にかがやく」(第28回)、「ウチナンチュ」と「ヤマトウンチュ」<sup>9</sup>の小学生が放課後に「オジー」の方言学校で学んだ成果を発揮する諸見里杉

---

<sup>6</sup> この点については、仲程昌徳は「説明的な部分が少々気にならないわけでもないが、生き生きとした文体が好感をもたれた」(「第1回児童文学賞の審査講評〈中〉」『琉球新報』1989年5月19日)と述べ、徳田■は「大人の小説小作品といってもよいこの作品は、子どもたちはその迫りに押され気味になることはないかといった話し合いも出た」ことを述べている(「第1回児童文学賞の審査講評〈上〉」『琉球新報』1989年5月18日)。

<sup>7</sup> 夜に働く母親が登場する受賞作品として、もりおみずきの「お母さんごっこ」(第10回)がある。この小説は、夜働く母親と暮らす「陽子」が「たまごっち」のゲームに夢中になる余り、文鳥ピピの世話を怠り死なせてしまうが、ピピの死を通じてゲームのように「リセット」できない命の尊さを学ぶ、という物語である。この作品は、『あかねちゃんのふしぎ もりおみずき作品集』(ボーダーインク、2003年)に収録されている。

<sup>8</sup> この作品に関しては、「老人」というよりも異質な他者との交流という方が適切である。異質な他者との交流という意味では、「ガメラの南の島」(第1回)以外に、船の家をつくる「ジャーおじさん」と中学受験に身が入らない小学生との交流を描く野原誠喜「ジャーじいさんと船の家」(第26回)がある。

<sup>9</sup> 沖縄出身者＝ウチナンチュと県外出身者＝ヤマトウンチュ、「ナイチャー」双方が登場する作品がある一方で、片方の親が沖縄出身者や沖縄生まれ県外育ちという設定も見られ

子「ウチナーグチしりとりバトル」(第 30 回) などがある。老人と子どもの交流の背景を探っていくと、沖縄戦の記憶が浮かびあがってくる。次節では、沖縄戦と子どものかかわりを描いた作品をとりあげてみたい。

## 2 沖縄戦と子ども

武富良祐「赤い屋根のレストラン」(第 3 回)<sup>10</sup>は、会社を辞めた「ゲンさん」夫婦が小高い丘の上に赤い三角屋根のレストランを開店した後に起きる事件を描いた作品である。夏休みに入り、小さい子ども連れの家族が訪れるたびに、子どもが外を指さしておびえながら泣き出すことが相次ぐ。「ゲンさん」が泣いていた子どもに理由を尋ねたところ、ボロボロの服を着た 3 人の子供がいるのが見えたという。「松助じいさん」から、レストランのある場所は沖縄戦で一家全滅した家があり、そこで 6 歳と 4 歳の男の子と 3 歳の女の子が餓死したという話を聞く。その後、「ゲンさん」は真夜中にレストランに入ってきた 3 人の子どもの幽霊に食事を与えたのをきっかけに、毎日料理をお供えするようになる。ある日、客の女の子の話で、子供たちが手を振りながら天に昇っていったことを知る。

この作品では、戦争中食べ物を求めて亡くなった子どもたちの霊が、レストランに来る子どもには(真夜中の場面では「ゲンさん」にも)見える設定になっている。仲程昌徳は、「少年少女の無垢なる者にのみ見える世界及び少年少女の死・昇天がテーマであったし、何よりも鎮魂を通して、かよわいものたちに多くの犠牲を強いる戦争の悲劇を描いた点が評価された」<sup>11</sup>と述べた<sup>12</sup>。この作品にあらわれる子どもたちの霊には、沖縄戦で食べ物を求めながら亡くなった子どもたちの思いだけでなく、空腹を抱えながら戦場を逃げ惑った子どもたちの生きづらさも投影されていると考えられる。沖縄戦で餓死した子どもたちの無念さを受けとめる「ゲンさん」のような存在によって、子どもたちの魂も救われたに違いない。

玉城久美「森から来たリョウガ」(第 9 回)<sup>13</sup>は、横浜の小学校から転校してきた五年生

---

る。後者の作品として、沖縄生まれ東京育ちで沖縄に転校した小学生を描いた山里幹直「沖縄病にうなされて」(第 6 回)、父は沖縄生まれで母と本人が横浜育ちの転校生が登場する「森から来たリョウガ」(第 9 回)、広島生まれの父と沖縄生まれの母を持つ小学生が語り手の津嘉山ながと「おじいちゃんの背中」(第 11 回) などがある。「転校」から生じる問題については後述する。

<sup>10</sup> 武富良祐「赤い屋根のレストラン」『琉球新報』1991 年 5 月 20 日、夕刊。

<sup>11</sup> 仲程昌徳「新報児童文学賞選考評」『琉球新報』1991 年 5 月 23 日。また同日掲載の選評のなかで徳田■は「この作品は、戦争の暗さみにくさを語るのではないが、新しい戦争児童文学としての作品であるように思う」と述べた。

<sup>12</sup> 選考の際に、岡本恵徳は、「文章には問題があるが、意欲作である。聞いたことのない独立した幽霊話としても大変な力がある。普遍化できる。新しい伝説がつくられているような期待できる作品」と発言した。また仲程は「テーマ(反戦平和)主義的な感じがする。児童小説としては重い題材」と指摘した。「第 3 回『新報児童文学賞』選考経過」『琉球新報』1991 年 5 月 20 日。

<sup>13</sup> 玉城久美「森から来たリョウガ」『琉球新報』1997 年 7 月 22 日。

の「ひより」が同級生の「太一」とともに、沖縄戦で亡くなった幽霊の「リョウガ」が弟に渡したかったコマを探し出す物語である。子どもが沖縄戦で亡くなった子どもの霊を見ることができるという設定は、「赤い屋根のレストラン」と重なるが、「赤い屋根のレストラン」では子どもであれば誰でも霊が見えたのに対し、「森から来たリョウガ」では、幽霊の「リョウガ」の姿が見え、声を聞き取れるのは横浜からの転校生の「ひより」だけである。「ひよりの父は沖縄の人だけれど、母親とひよりはずっと横浜で育ったので、沖縄の方言はほとんど知らない」という設定のため、「ひより」は「リョウガ」の姿も声も認識できない「太一」の翻訳を通じて「リョウガ」の語る「方言」を理解することになる。岡本恵徳は、「沖縄戦の戦争体験というシリアスな題材をとりあげながら、しかしそれを深刻で感傷的に語るのではなく、かと言って軽薄に傾くのもなく、バランスよく描ききっている点」や「登場人物である少年少女がリアルで、とりわけ会話が方言をとりこみながら生き活きと生きているし、ファンタジックな要素がリアルな現実と程よく融けこんでいるところが高く評価された」<sup>14</sup>と述べた。

ここまで沖縄戦で亡くなった子どもの霊との関わりを描いた2作品をとりあげたが、受賞作の中には沖縄戦を直接的に描いた作品もある。前田よしこ「小さな歌の物語」(第4回)は、戦争で離ればなれになった親子の物語である。1945年頃、中頭郡のある村で小さな雑貨店を営む夫の「松平」と妻の「カヨ」は三歳になる「トシエ」と暮らしていた。「カヨ」は編み物をしながら「ベイベーのうた」を歌うときに、歌の最後に「コッコイ」と言いながら、自分の額と「トシエ」の額をぶつけて遊んでいた。「松平」が満洲に出征後、残された「カヨ」は、沖縄戦のさなか、「トシエ」を連れて防空壕に避難していたが、爆撃を受けて負傷し、「トシエ」と離ればなれになる。「カヨ」は、アメリカの軍医が残した「ムスメサン、ダイジョウブデス。アナタガナオルマデ、コジイン(孤児院)ニイレテアリマス」という言葉を頼りに、戦後満洲から帰ってきた「松平」とともに沖縄中の孤児院を探し回るが、見つからなかった上に、失意の「松平」が「精神病院」に入院して1カ月後に亡くなってしまふ。その後、「カヨ」は沖縄戦で負傷した子どもがハワイの病院に送られたことを知り、ハワイを訪れる。自分の名前も覚えていない「ケイト」に「松平」の面影を見るが、決め手に欠けたまま、お別れ会の日を迎える。アメリカの子どもたちの歌のお礼に、沖縄から来た親たちが「ベイベーのうた」を歌う。

いったアンマーまーかいが  
ベイベーの草刈いが  
ベイベーのまさ草や  
はるぬワカミンナ

<sup>14</sup> 岡本恵徳「第9回琉球新報児童文学賞選評／短編児童小説部門」『琉球新報』1997年7月15日。

アングワーそーてい

.....

みんなが歌い終わったときでした。ステージの上のケイトが、

「コッコイ」

とつぶやき、小さな額を前にぬっと突き出したのです。

親たちはどっと笑いました。が、カヨは笑いませんでした。全身がガタガタ震えてたっちはいられませんでした。

気がついてみるとカヨは大きな声で泣きじゃくりながら、小さなケイトの体にしがみついていたのです。<sup>15</sup>

選評では、作品の構成に難があること<sup>16</sup>を指摘しつつ、「結末はすぐれた着想であった」（岡本）<sup>17</sup>、「最後の場面、感動的である」（仲程）<sup>18</sup>、結末で「泣かされた。後半のこの部分での感動させられたことを大きく評価して入賞とした」（徳田）<sup>19</sup>というように歌にまつわる記憶が戦争で離ればなれになった親子を結びつける結末の場面が高く評価されたことがわかる。さらに岡本は「多分作者の人を視ることの確かさを示していると思う」と述べた<sup>20</sup>。この作品は、子を思う親の情愛の深さが奇跡につながる家族再会の物語といえるが、沖縄県民の4人に1人が亡くなったといわれる沖縄戦の歴史的事実からすると、典型的な物語というよりも「あってほしい」という切実な願いが込められていると読める。

「小さな歌の物語」のように沖縄戦を直接的に描いた受賞作は少ないが、その一方で沖縄戦体験者と子どもの交流を描いた作品が見られる。津嘉山ながと「おじいちゃんの背中」（第11回）<sup>21</sup>は、孫が沖縄戦体験者の祖父の傷の秘密に迫る作品である。広島生まれの父と沖縄生まれの母を持つ小学生の「のり子」は、祖父の背中にあるアザが気になっていたが、学校の宿題で沖縄戦体験者から話を聞いて作文を書くことになり、祖父の姉から、沖

<sup>15</sup> 前田よしこ「小さな歌の物語」『琉球新報』1992年5月20日

<sup>16</sup> 徳田■「第4回新報児童文学賞選評」『琉球新報』1992年5月21日。徳田は、小説の「中頃までの文章が物語りではなく、ただ説明したものの感がだらだら続く。読み進めるのに、飽きがある」と指摘した。

<sup>17</sup> 岡本恵徳「第4回新報児童文学賞選評」『琉球新報』1992年5月21日。岡本は、「前回のようによびきんですぐれたという強い印象を与える作品はなかった」なかで、「とりわけ強いインパクトを受けた」作品として「小さな歌の物語」をあげていた。

<sup>18</sup> 仲程昌徳「第4回新報児童文学賞選評」『琉球新報』1992年5月21日。仲程は、最後の場面の描き方を評価した上で、「語りによる方法がよかったかどうかもあるが、まだ余分のものを多く残している」と述べた。

<sup>19</sup> 徳田■「第4回新報児童文学賞選評」『琉球新報』1992年5月21日。引用した一文の後に「欲を言えば、前半のところを読み返し読み返して構成に気を使ってみることが読み手をもっと感動させると思う」と述べた。

<sup>20</sup> この一文に続いて、「惜しいことにそこに至る過程が平板にすぎ、文章が説明的に流れすぎている」と構成の問題点も指摘した。注17岡本前掲。

<sup>21</sup> 津嘉山ながと「おじいちゃんの背中」『琉球新報』1999年6月15日。

縄戦のさなか、祖父が妹を連れ戻しに行った際、爆弾が落ちて負傷した上に妹が亡くなった話を聞く。その話をまとめた作文を読み終えたとき、祖父が涙を流すのを目にする。沖縄戦の組織的戦闘が終結した6月23日の「慰霊の日」に合わせ、沖縄各地の学校で行われる平和教育の一環として家族の戦争体験を聞く取り組みが見られる。この作品では、「慰霊の日」関連の宿題がきっかけで、祖父の背中のアザの秘密を知るが、2000年代以降の受賞作では、戦争体験者の語り、子どもたちが困難を乗り越えるきっかけになっていくのである。

### 3 戦争体験を聞く

糸数貴子の「中国からの絵ハガキ」(第17回)は、不登校の小学生が祖母の戦争体験を聞くことを通じて心を開いていく作品である。小学校5年生の「亜希」は、二学期から不登校になり、「バアバア」の家で過ごしていたが、ある日、「バアバア」のきょうだいやいとこといっしょに中国旅行に行くことになる。満洲生まれの「バアバア」から「中国の人たちを見下していた」という戦争の頃の話聞いた「亜希」は、「いじめって戦争と似ているな」と思い、不登校の原因を語り出す。親友が他の子をバカにしたり、からかうのを注意したら無視されてしまい、「一人ぼっちみたいな気分になっていたこと」や本当は学校に行きたいけど「怖い」と打ち明ける。

また無視されるかも、と思うと怖い。私が無視されてるって気付いているのに、何もしてくれなかった先生や他のクラスメートも怖い。親友も自分も嫌いになってしまいそうなのも怖かった。<sup>22</sup>

それに対し、「バアバア」は、「戦争もね、怖かったよ、嫌だったよ」、戦争に行きたくなくても「行きたくないって言えなかった」けれども、「亜希はイヤだって、行きたくないって言えるさね。言いたいことが言える、自分の行動を選べるって平和の基本だなんて思ってさ」とつぶやく。沖縄に帰った「亜希」は、「自分は自分。周りの目なんか気にしないで、自分が選んで行動するんだよ」という「バアバア」の言葉を胸に学校に行くことを選ぶ。

もりおみずきは、「戦後60年にふさわしい作品」で、「平和を考えながら自己発見していく少女、亜希に共感した」ことから、「さらに多くの子供達、お母さん達に読んでいただきたい。きっと人の心に寄り添う優しさや自分を大切に作る強さについて考えさせられるに違いない」<sup>23</sup>と述べた。不登校を選んだ「亜希」の行動を、「大切な自分を守るために」選んだ行為ととらえ、「そういう強さが自分にあるんだっていうことを忘れちゃダメだよ」と励ます「バアバア」の視点は、戦時中に嫌なことを拒否できず、戦争で父親を亡くした「苦

<sup>22</sup> 糸数貴子「中国からの絵ハガキ」『琉球新報』2005年7月21日。

<sup>23</sup> もりおみずき「第17回新報児童文学賞選評／短編児童小説」『琉球新報』2005年7月21日。

い記憶」に基づいている。信頼関係を築いた「バァバァ」との対話があったからこそ、「亜希」は戦時中の生きづらさと現在の生きづらさを結びつけることができたのである。

いじめの原因となる転校は、環境の変化によって様々な困難に直面することが多く、受賞作でもくりかえし描かれている<sup>24</sup>。長山しおり「美乃利の季節」（第27回）は、母ががんの治療を受けるため、「阿間島」から転校した小学校五年生の「美乃利」が主人公である。「美乃利」は転校先の糸満の小学校で『ドラえもん』のジャイアンに似ている男子の「翔太」に「ミノムシ」というあだ名をつけられてからかわれるが言い返せず、しだいに「ミノムシ……そのことばは、まるで弾丸のように美乃利の心臓をつらぬいた」と感じるようになる。母の手術が決まった日、祖母は「艱難汝を玉にす」ということわざの意味として、「人は、いろいろな経験をつんで、大人になっていくんだよ。楽しいことだけではなくて、苦労や困難にたえてこそ、立派な人間になれるという教えさあ」と話した後、祖母が4歳の頃に戦争があり、「アンマー（母親）は、私たちのすぐそばで弾に当たって死んでしまった」と自らの戦争体験を語り始める。

「アンマーが死ぬ前にね、わたしたちきょうだいに必死で大切な言葉を残してくれたんだよ。体じゅう、血だらけになりながら」

「血だらけで？」

「そう、とっても苦しそうだった。『ユウチチヨウ（よく聞きなさい）きょうだいは助け合いなさい。イジチリヨー』そう言ってアンマーは息を引きとったんだよ。だからバァちゃんたちきょうだいは、そのことばをとっても大事にして生きてきたのよ」

「……………イジチリヨーってなに？」

「そうだねえ……………今の言葉になおすと…勇気を持つ、ということかねえ。マキテーナランドオ（苦しみに負けるな）という強い気持ちさ。バァちゃんは、これまで苦しい時、いつでもこの言葉を心の中でとなえてきたのさあ。すると、なんだか腹の底から、こう、力がわいてくるんだね。魔法の言葉だよ」<sup>25</sup>

その後、「美乃利」は、「イジチリヨー」という「魔法の言葉」をとなえて、「翔太」のいやがらせに耐え、母の手術も無事に成功する。しばらくして、体育の水泳の時間に、「翔太」から逃れようとした「美乃利」は、足を踏み外してプールに落ちるが、得意の水泳でピンチを乗り切り、「翔太」を含むクラス全員から称賛される。転校先での嫌がらせに苦痛を感

<sup>24</sup> 山里幹直「沖縄病にうなされて」（第6回）は、沖縄生まれ東京育ちで沖縄に転校してきた「カズヤ」がキジムナーの話（本）を通じて「マサヤ」と交流する話。松浦茂史の「空とぶ転校生」（第7回）は、インドからの転校生のいじめを救ったことで友達になり、空とぶ呪文をめぐる物語が展開される。上原利彦の「マナブのある朝の出来事」（第14回）は、那覇から来る転校生をめぐる小学六年生の学級委員長が思い悩む作品である。

<sup>25</sup> 長山しおり「美乃利の季節」『琉球新報』2015年8月6日。この作品は、長嶺幸子『父の手作りの小箱』（沖縄タイムス社、2016年）に収録されている。

じていた「美乃利」は、祖母の戦争体験から導き出された「イジチリヨー」という言葉に励まされ、困難な状況を切り抜けたといえるだろう。

平岡禎之「雨あがりの空にかがやく」(第28回)は、吃音にコンプレックスを持つ「和希」が主人公である。「和希」は親友の「春人」に「話しかたが、たどたどしいことを言われた」と思って、なぐってしまう。その話を聞いた曾祖父の「盛吉」は、「和希」を連れ出し、戦争中友人の「朝介」となぐり合いのケンカをし、その後、再会できなかった話を語り出す。

そのあと、しばらくして家に帰されたんだけど。家に戻ってみたら、焼け野原でなんにもない。あのとき家に残った親ときょうだいは、みんな死んでいた。でも、悲しいとも、何も感じなくてね。あのときは、みんな生きるために必死だった。ひもじいのは苦しいよ。だから、公園で食べ物を配るわけさあ。

ある日、お使いで市場に買い物に行った。すると、人ごみの中に朝介みたいな後ろ姿が見えたわけ。いっしょうけんめい、追いかけた。でも、見失った。がっかりして立っていると、急に思い出した。朝介の家は全めつだったと兄ちゃんたちが話していたこと。そのとき、二度と朝介と会えないと、はっきり気づいた。家族もみんな帰ってこないと急にわかってね。なみだが勝手にぼろぼろ流れたよ。<sup>26</sup>

その後、「和希」と「春人」は仲直りするが、注目したいのは、曾祖父の話を聞いた「和希の頭のなかで、軍かんからうたれた大ほうのタマが飛んで来た」のを感じる場面である。

ドッカーン！

タマがショッピングセンターに当って、窓ガラスが割れて、建物がくずれ落ちる。たくさんの人が悲鳴をあげて逃げて行く。

(もし今、戦争が始まったらどうなるだろう)

和希は、そう考えると今見ている街の風景が、まるで映画のセットのようにもろくてこわれやすいように思えた。

「盛吉」の語る「戦争の記憶」が「和希」の中に流れ込んだ結果、自らにも起こり得ることとして、現在に引きつけながら戦争体験を追体験しているといえる。そしてその後、サッカーの練習をする運動場の上空をアメリカ軍のオスプレイが通過して「黒い影」を落とす際に、「サッカーをしている春人たちが次々と、その影に飲み込まれていく」のを感じるが、「だれも気にしない。だれも空を見上げない」なかで、「和希」は「顔をしかめて空をにらんだ」のである。それは、戦争が終わったはずの現在が戦争につながるものによ

---

<sup>26</sup> 平岡禎之「雨あがりの空にかがやく」『琉球新報』2016年7月21日。

って「もろくてこわれやすい」ものであることを感受したふるまいといえるだろう。

#### 4 境界線をなくす

沖縄の戦後小説のなかで沖縄戦や戦争の記憶は重要なテーマであるが、「アメリカ（人・兵）」も多く描かれている<sup>27</sup>。しかしながら、琉球新報児童文学賞受賞作の中では、米軍基地や米兵はほとんど描かれていない。こうしたなかで、大嶺則子の「フェンス」（第6回）は、沖縄の子どもたちがアメリカ人と「沖縄人」のハーフの少年と交流する小説である。

米軍基地に隣接する町で暮らす「僕」は、友達といつも遊ぶ「秘密の場所」で、「アメリカ」の3人の少年とケンカになりかけるが、1人の少年が説得して事なきを得る。ケンカになりかけたのは、以前、「フェンスの中から、学校帰りの僕らに、石を投げつけるヤツらがいた」り、「スクールバスから、あきらかに、人をバカにした様な事を言ったり、食べもののクズを投げつけ」られたことなどがあって、「外人の子を好きになれない」ことが背景にあったからである。「アメリカ」の少年たちとのトラブルから数日後、「僕」は、ケンカを仲裁した少年が万引き事件に巻き込まれたのを助ける。じつはその少年「ケン」は、「母親が沖縄人とアメリカ人のハーフ」で、日本語も上手に話すことができたのである。「僕」と「ケン」はいっしょに遊ぶようになり、しだいに「僕」の友達とも打ち解け、「ケン」のバースデーパーティーに「僕」や友達が招待されるが、友達の「ヒロのオジー」からの抗議で取りやめになる。じつは「ヒロのオジー」には、酔った数人の米兵に袋叩きにあった後遺症で身体が不自由になった後、若くして亡くなった息子がいたのである。後日、「ケン」から父親の体の具合が悪く、アメリカに帰ることが告げられる。「僕」や友達は、「とっておきの別れのプレゼント」として「フェンスを消してしまう」ことを考え、送別会の夜に、芝生の生えた「フェンスの向こう側と同じ緑色」のペンキを塗って境界線をなくすことに成功する。記念撮影の後、「僕」や友達は、鉄条網を越えて、念願だったフェンスの内側の芝生の坂をすべりおりることを実行する。その後、大雨が降り、「僕達が苦心してぬった水性ペンキは、ほとんど人目にふれる事もなく、流されてしまった」が、ピンボケになりながらも「僕達の後からフェンスはきれいに消えていた」ことがわかる「証拠写真」が残った。その写真を持って「ケン」がアメリカに帰った後、「僕」は次のようにつぶやく。

僕は、此頃、時々思う。遠い将来、この基地がなくなり、フェンスも、取り除かれる日が来るのだろうか。そうなったら、僕はこの広い芝生をかけまわり、坂をすべり、ガジュマルの木の上に秘密の場所をつくろうと思う。（中略）基地の問題は、難しすぎて、僕らには、よくわからない。ただ、僕達と、ケンとの心には、フェンスはもうない。<sup>28</sup>

<sup>27</sup> 仲程昌徳『アメリカのある風景—沖縄文学の一領域—』ニライ社、2008年参照。

<sup>28</sup> 大嶺則子「フェンス」『琉球新報』1994年6月1日。

この作品に対し、岡本恵徳は「日米のギャングエイジたちが対決ではなく、結びつこうとする心情に戦後五十年の時の流れを感じる」<sup>29</sup>と評価した。徳田■は『フェンス』は入選作に選ばれたが、これは沖縄でなければ、いやフェンスの外側に並ぶ家々の子どもたちでなければ……」と述べた後、「まさに沖縄の現状と沖縄人の心が表現されていて良い」<sup>30</sup>と評し、仲程昌徳は「フェンスを塗りつぶすことで、基地がなくなるわけではないが、少なくともそのような行為が、やがてお互いに手をつなぐ手立てとなっていくであろうことに夢をかけることはできる。その夢がいい」<sup>31</sup>と評価した。米軍基地のフェンス（鉄条網）を不可視化することで、人びとを分け隔てる心のフェンスをなくそうとするこの小説の試みは、生まれた時から基地があるのが日常の風景となった沖縄の子どもたちの想像力の可能性を広げる手がかりを与えてくれるに違いない。

## 5 生きることを学ぶ

ここまで沖縄戦や米軍基地を描いた受賞作をとりあげた。他の受賞作の中には、ネズミから買ったチャイムを鳴らすと本の中から人が出て来る具志肇「不思議チャイムでてんやわんや」（第8回）や絵本の中から病気の女の子があらわれる山城勝「チーちゃんの誕生日」（第13回）のように本の中から何かが登場する物語がある一方で、砂川ひろ子「ネコのしっぽと空色のかさ」（第12回）ではパソコンの画面の中のネコに導かれて「ちょっと昔の世界」に旅立つ設定になっている。また語り手や登場人物が人間ではない作品として、どんぐりが語り手で森の植物たちと会話する島てんつき「アラカシ」（第7回）、本好きでパン屋を営むカマキリが助けた蝶を思い続ける備瀬毅「蝶の手紙」（第12回）、テストの点数にまつわる数字が目の前にあらわれる与那嶺愛子「すうじの反乱」（第19回）、願いをかなえると消えてしまう流れ星の運命に疑問を持つ流れ星が主人公の伊波祥子「流れ星のリユウ」（第24回）、山小屋を支えている石が語り手のなつイロ「おいらは石」（第25回）などがある。他にも頭の上に浮かべるリング型の電灯の光り具合で健康や心の状態がわかる石垣貴子「心の色」（第17回）、「ビッグピック王国」の「チョヤッカイ」王と秘書官の「ミスターエス」のやりとりを描いた伊川紘子「チョヤッカイと幸せの焼酎」（第23回）、海の生物の描写が巧みな諸見志津子「イノーの秘密」（第24回）といった作品もある。こうした多様なテーマは、児童小説を読む子どもたちの想像力を押し広げ、またしんどい状況にいる子どもには現実とは異なる物語世界の中に心を落ち着かせる居場所を見つけることができるかもしれない。けれども、子どもの生きづらさを正面から描いた作品からは、別の可能性が開かれていくのである。

新垣勤子「小さいのちの帆をはって」（第18回）は、小学校五年生の「璃世」が児童

<sup>29</sup> 「第6回新報児童文学賞選考経過」『琉球新報』1994年6月2日。

<sup>30</sup> 徳田■「総評／第6回琉球新報児童文学賞選評」『琉球新報』1994年6月3日。

<sup>31</sup> 仲程昌徳「短編児童小説部門／第6回琉球新報児童文学賞選評」『琉球新報』1994年6月3日。

養護施設で出会った人たちとの交流を通じて心を開いていく作品である。「璃世」は、福祉課の職員に連れられて施設を訪れた日に、養護学校に通う同じ学年の「スーちゃん」、柔らかな笑顔で語りかける職員の「心実（もとみ）さん」、厳しい口調の職員の「多智子さん」と会う。「璃世」は、シングルマザーの母親が仕事を探しに「内地」に行くために「おばあ」に預けられていたが、母からの便りが途絶えた後に「おばあ」が亡くなり、親戚に引き取られることもなく、「みなしご」として児童養護施設に預けられたのである。食事も喉を通らず一夜を過ごした「璃世」は、翌日、「心実さん」の妊娠のお祝いに招かれるが、「(生まれてくることを、こんなによろこばれる赤ちゃんもいる。璃世とは大ちがい)」ともやもやした気持ちになり、「この施設、おもしろくないっ。こんなところ、いたくないっ」と言って施設を飛び出してしまう。大雨の中、ずぶぬれになった「璃世」を「心実さん」が見つけるが、「心実さん」は体調を崩して入院する。一週間後、お見舞いで病院を訪れた際に、「心実さん」が流産したことを知る。その日の夕方、「多智子さん」は「璃世」を海に連れて行き、海中のサンゴの産卵を見せながら、「あんなにたくさんの卵のうち、うまく成長できるサンゴは、ほんの少しだけなんだ」、「命をさずかるということが、どんなにまれで、どんなにありがたいことか…」、「あんたもそうやって生まれてきたんだよ」と「璃世」に語りかけた。「璃世」が中学三年生、「スーちゃん」が養護学校の中学部三年生となったある日、「心実さん」の長女「愛ちゃん」の一歳の誕生パーティーに招かれる。「璃世」は、施設に入って知り合った人たち、テーブルに並ぶごちそうや花、サンゴの写真、「すべてのものが璃世の心を温かくした」のを感じた後、「(お母さんが、璃世を生んでくれたから)」と母への感謝の気持ちを示しながら、自らの思いを吐露する。

つらいこともいくつもあるけれど、生きているからこそ、これらの愛しいものたちに出会うチャンスが与えられているのだと思った。

生きているということは、小さな命の舟をせいいっぱいにこいで、命の帆を風にはためかせながら愛しいものたちをさがしゆく、宝さがしの旅だと思った。<sup>32</sup>

もりおみずきは、『生きるとは喜びを見つける旅』と体得するまでの璃世の姿が、優れた文章力で無駄なく描かれ、全編に優しさ温かさが溢れていた<sup>33</sup>と評した。「みなしご」の境遇を嘆いていた「璃世」が「心実さん」や「智美さん」と信頼関係を築くことで、生を肯定的にとらえなおし、心を落ち着かせる居場所を見つけたのである。

## 6 児童小説を読むということ

本稿では、琉球新報児童文学賞を受賞した短編児童小説を中心に論じてきたが、最後に

<sup>32</sup> 新垣勤子「小さいのちの帆(ほ)をはって」『琉球新報』2006年7月25日。

<sup>33</sup> もりおみずき「第18回新報児童文学賞選評／短編児童小説」『琉球新報』2006年7月25日。

児童小説を読むことの可能性を考察する。児童文学者の脇明子は、子どもたちを取り巻く環境が殺風景に見えるなかで、「生きる気力を保つためには、心のなかに、人間に対する基本的な信頼感や、この世界に対する愛をあたためていなくてはなりません」<sup>34</sup>と述べた後、「夢見ることが困難な世の中で生きていくとき、物語で出会ったお気に入りの場所、お気に入りの人たち、お気に入りの台詞や場面をたくさん持っているというのは、じつに心強いことです」<sup>35</sup>と指摘した。また加藤彰彦は、子どもの貧困を克服していくために、「家庭環境（就労問題）を安定化させること」と「学校教育のあり方が大きなカギを握っていること」を指摘した上で、「子どもたちの生活力、生命力、生き抜いていく力というのは、単なる座学や知識ではなく、他の人と交流しながらつくりあげていくものである」<sup>36</sup>と述べた。

生きづらさを感じる子どもにとって、話を聞き、理解してくれるような信頼できる大人（親・家族・教員含む）の存在は大きい。樋口謙一「ガメラの南の島」（第1回）の「ガメラ」、糸数貴子「中国からの絵ハガキ」（第17回）の「バァバァ」、新垣勤子「小さいのちの帆をはって」（第18回）の「心実さん」と「多智子さん」、野原誠喜「ジャーじいさんと船の家」（第26回）の「ジャーおじさん」、長山しおり「美乃利の季節」（第27回）の「美乃利」の祖母、平岡禎之「雨あがりの空にかがやく」（第28回）の「和希」の曾祖父の「盛吉」、諸見里杉子「ウチナーグチしりとバトル」（第30回）の「政賢」のオジーなどは、主人公の子どもたちの良き理解者であり、困難な状況から一歩踏み出すきっかけを与えてくれる存在である。

また脇明子は読書を通じて「不快感情の体験」をすることの大切さを指摘した上で、次のように述べる。

現実につらい状況に陥ってしまうと、そこからいい形で抜け出せるとはかぎらないけれども、ちゃんとした物語なら納得できる形で抜け出せて、しかもその体験が意味のあることだったと感ずることもできる（中略）そんな物語に出あっていたら、現実に似たような出来事にぶつかったとき、たとえ対処の仕方の参考にはならないとしても、「いつかは抜け出せる」という希望を持つ助けくらいにはなるはずです。<sup>37</sup>

この言葉は、生きづらさを抱える子どもが児童小説を読む可能性を考えるうえで示唆的である。読者の置かれた現状と小説で描かれる人物がつらい体験をする場面が重なった場合、生きづらい思いをしているのが自分だけではないことに気づくとともに、小説の登場人物が苦難を乗り越えて問題を解決するところにヒントを得て、自らが置かれた厳しい状況から抜け出せる方法が見つかるかもしれないからである。

<sup>34</sup> 脇明子『読む力は生きる力』岩波書店、2005年、137頁。

<sup>35</sup> 注34 脇前掲、138頁。

<sup>36</sup> 加藤彰彦『貧困児童 子どもからの脱出』創英社／三省堂書店、2016年、220頁。

<sup>37</sup> 脇明子『物語が生きる力を育てる』岩波書店、2008年、84～85頁。

興味深いのは、2000年代の受賞作品の中で、戦争体験者の証言が、現在を生きる子どもたちが直面する問題に立ち向かう原動力になっていることである。戦争体験者が高齢化し、戦争体験の継承が喫緊の課題となるなかで、沖縄戦に関する書物を読み、戦争体験者の証言を聞き、戦跡を歩きながら想像力を駆使して沖縄戦の記憶を追体験しようとする取り組みは極めて重要である。くわえて沖縄戦を過去の出来事として想像するだけでなく、現在にも起こり得ることとして受けとめ、苦境から逃れて生き延びる方法を考えることも大切な試みである。

子どもの生きづらさに寄り添うような児童小説を読むことは、現実をとらえる視点を豊かにし、生のかたちを多様に思考する力を身につけ、これから起こり得ることを想像する力を鍛えることにつながるのではないだろうか。もちろん、小説を読むだけで、困難な状況から抜け出せるわけではないが、1ミリでも進めること<sup>38</sup>が必要である。岡本恵徳は、冒頭に引用した選評のなかで「長い時間の幅で見ると、間違いなく（作品の）レベルが高まっている」、「やはり18年という積み重ねは実に大きいというのが実感である」と述べた後、次のような言葉を記していた。

ただ、残念なことはそういう長年の実績が多くの人々に共有されていないことである。せめてこれまでの入選作品だけでも一冊の本にまとめられていれば、と思う。それは、現在の子供たちに大いに感動を与える一冊になるに違いないが、そればかりでなく、これから児童文学に携わろうとする人たちにとっても役に立つに違いない。これはぜひ実現して欲しいもののひとつである。<sup>39</sup>

本稿でとりあげた作品のいくつかは、単行本に収録されているが、作品の多くは受賞時に紙面に掲載されたままであり、一般の読者が容易に作品を読めないのが現状である。岡本が提案したように、短編児童小説部門と創作昔ばなし部門の受賞作が一冊（受賞作の分量的には二冊以上）にまとまるのが理想的だが、何とか読めるかたちにしたいと考えている。本を読むのが苦手な子どもたちにも、作品を音読しながら読み方を説明し、わからない言葉や気になる場所を確かめるような読み聞かせの実践につなげていきたいからである。立ち止まって思考し、想像力を膨らませるような読み聞かせは、言葉に対する感性をみがき、困難な状況を生き抜く力を育てる原動力になるに違いない。

## 参考文献

『青い海』第9巻第8号／通巻86号1979年9月号、青い海出版社

『青い海』第10巻第7号／通巻95号1980年8月号、青い海出版社

---

<sup>38</sup> 湯浅誠『「なんとかする」子どもの貧困』角川書店、2017年参照。

<sup>39</sup> 注1 岡本前掲。

『青い海』第11巻第7号／通巻105号1981年8月号、青い海出版社  
『青い海』第12巻第7号／通巻115号1982年8月号、青い海出版社  
『青い海』第13巻第8号／通巻126号1983年10月号、青い海出版社  
『青い海』第14巻第10号／通巻137号1984年11月号、青い海出版社  
岡本恵徳『現代沖縄の文学と思想』沖縄タイムス社、1981年  
岡本恵徳『現代文学にみる沖縄の自画像』高文研、1996年  
岡本恵徳『沖縄文学の情景』ニライ社、2000年  
岡本恵徳『「沖縄」に生きる思想 岡本恵徳批評集』未来社、2007年  
沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983年  
加藤彰彦『貧困児童 子どもの貧困からの脱出』創英社／三省堂書店、2016年  
齋喜喜美子『近代沖縄における児童文化・児童文学の研究』風間書房、2004年  
仲程昌徳『沖縄の戦記』朝日新聞社、1982年  
仲程昌徳『アメリカのある風景』ニライ社、2008年  
仲程昌徳『沖縄文学の諸相』ボーダーインク、2010年  
日本児童文学協会編『日本児童文学』第42巻第8号、1996年8月号「特集／沖縄と戦争  
児童文学」  
日本児童文学協会『県別ふるさと童話館』編集委員会編『愛蔵版 県別ふるさと童話館 47  
沖縄の童話』リブリオ出版、2000年  
日本児童文学協会編『日本児童文学』第58巻第1号、2012年1月号「特集／沖縄の想像  
力・沖縄への想像力」  
長嶺幸子『父の手作りの小箱』沖縄タイムス社、2016年  
もりおみずき『あかねちゃんのふしぎ もりおみずき作品集』ボーダーインク、2003年  
もりおみずき『ティダピルマ もりおみずき作品集』2015年  
湯浅誠『「なんとかする」子どもの貧困』角川書店、2017年  
脇明子『読む力は生きる力』岩波書店、2005年  
脇明子『物語が生きる力を育てる』岩波書店、2008年